



真鍮とアルミダイカスト、そしてラバーを強固に一体化することで振動を抑えこんでいる。質量に不均一な偏りがあると回転時に振動やノイズの原因となるため、新幹線の車輪製造時などに使用されるバランス調整機を応用してバランスを精密に調整している。



(上) コアレス・ダイレクトドライブ・モータ
(下) 鉄芯を除いて、銅線をおにぎり型に巻いたコアレスステータ



復活を遂げた「SL-1200G」

いま、アナログレコードが人気である。デジタル音楽配信全盛の今日において、アナログならではの耳あたりのよい音色が再評価され、世界中で人気が高まっている。これを受けて、パナソニック(株)はアナログレコードプレーヤー「Technics(テクニクス)」SL-1200シリーズを復活させ、話題を呼んでいる。

【累計約350万台を出荷したSL-1200シリーズ】



歴代モデルのなかでも1979年に発売されたMK2モデル(左)はロングセラーとなった。また2002年に発売されたMK5モデル(右)はDJに愛用され、クラブの定番となった。

世界の音楽ファン待望
アナログレコードプレーヤー「テクニクス」
銅を多用した新機構をひっさげ復活

今回の取材先

パナソニック株式会社
アプライアンス社

パナソニックのアプライアンス分野の商品(家電商品)の開発・製造・販売を担当する社内カンパニー。テレビやBD/DVDレコーダ、オーディオ、冷蔵庫、洗濯機、掃除機、電子レンジ、炊飯器、食器洗い乾燥機、美容・健康・調理機器、ルームエアコン、大型空調、給湯機器、ショーケース、厨房機器、自動販売機、ディスペンサー、コンプレッサー、冷凍機、真空断熱材、燃料電池等、事業領域は多岐にわたる。



世界のDJが愛用したテクニクス

2016年、イギリスのレコード売上は300万枚を超え、これはほぼ最盛期であった28年前の水準に達した。逝去したデヴィッド・ボウイの最新作レコードがよく売れているという。最近では著名アーティストのアルバムがCDとともにLPレコードも同時発売されることが増えた。需要が急増したため、レコードプレス工場では生産が追いつかない状態が続いている。

世界中でアナログレコード人気が高まるなか、大阪府門真市のパナソニック(株)アプライアンス社のテクニクスブランド担当者の元には、イשראלのDJから厚い書類が届いた。それは「アナログレコードプレーヤーSL-1200を復活して欲しい」という2万5千人分の手書きの嘆願書であった。

テクニクスのSL-1200シリーズとは1972年に発売されてから38年にわたり、累計約350万台という販売数を誇ったレコードプレーヤーである。ベルトドライブ方式が主流のなか、ダイレクトドライブ方式を採用し、演奏を素早く始められることからFM放送局で

使用され、またたく間に人気に火がついた。しかし、アナログ音源の市場が縮小していく中、惜しまれながら2010年に生産終了となった。

鉄芯を除き、銅線を巻いた
コアレスステータを採用

「再開発決定の前からSL-1200を復活させるにはどうすれば良いか。工場と相談を重ねていました。私自身、世界的なヒットとなったモデルの開発に携わったので思い入れは非常に強かったです」

こう語るのはパナソニック(株)アプライアンス社ターンテーブル開発担当の三浦リター。社内で優れたデジタルアンプが開発されたことから、「この技術でテクニクスを復活させたい」と若い技術者らが訴え、2014年、まずはスピーカー、アンプ、ネットワークプレーヤーがテクニクスブランドとして発売された。これを受けてアナログレコードプレーヤーの復活も望む声が高まり、SL-1200シリーズの再開発が決まった。

復活させるにあたって、すべての機構が徹底的に見直され、ゼロから設計、開発が行われた。

まず着手したのが特徴となるダイレクトドライブモータである。ダイレクトドライブは振動やノイズが低いものの、コギングと呼ばれる回転のムラが課題であった。「コギングの解消を図るため、鉄芯を除いて、銅線を巻いたコアレスステータを採用することになりました」こう語るのは同社開発担当の志波主幹技師。コアレスステータはコアと磁石の間に吸引力が発生しないため磁力が不均一にならず、コギングの発生を抑えることができる。コイルは0.2mmの純銅の線材が使用され、おにぎり型に巻かれている。この三隅部分等の巻き方には多くのノウハウがあるという。

安定した回転を実現する
真鍮ターンテーブル

とくに力を入れたのがターンテーブルである。レコードプレーヤーはシンプルな再生機構であるため、より安定して回転させることが音質に大きく関わる。

「そこで採用したのが真鍮を天面に使用したターンテーブルです。重量は従来の2倍以上となる3.6kg。真鍮とアルミダイカスト、そしてラバーを強固に一体化することで振動を抑えこんでいます」(志波氏)



パナソニック(株)アプライアンス社技術本部 ターンテーブル開発リーダー 三浦 寛 氏

社内では喧々諤々の論議が起こった。沸く上層部に対し、「真鍮は絶対必要です!」と開発者は訴えた。なめら



パナソニック(株)アプライアンス社技術本部 主幹技師 志波 正之 氏

か安定した回転に真鍮は不可欠であった。また、黄金に輝くターンテーブルは美しく、まさに新生テクニクスにふさわしい魅力となる。

「社内では責任者による音質チェックを「音決裁」と呼びますが、最終的には銅を多用したターンテーブルは圧倒的に良い音色を奏で、音決裁がおりました」同社の志波主幹技師はこう振り返る。

こうして誕生した新生SL-1200Gは、2016年6月、グローバル1200台の限定販売にも関わらず、国内300台の予約は開始から30分で完売となった。価格は33万円に及ぶ。この反響を受けて、晴れてレギュラーモデルの「SL-1200G」の販売が決まり、本格的な復活を遂げた。また最近、スタンダードモデル版も開発され人気を呼んでいる。生産が追いつかず、2〜3か月待ちの状態が続いているという。

新生SL-1200Gの音を聞かせてもらった。深みと迫力のある響きに圧倒される。レコードを知らない若い世代が優れたプレーヤーとして惹きつけられるというのもうなずける。モータやターンテーブルにとどまらず、あまるところなく最高の技術が注ぎこまれた。世界の音楽ファンの熱い支持を受けて、開発者が情熱をかけてつくり上げた製品である。しまいこんだ古いレコードをかけてもよし、最新版LPをかけてもよし。銅がきらめくターンテーブルにどんなレコードをのせようか。